

平成 21 (2009) 年度「NGO 長期スタディ・プログラム」最終報告書記載項目

提出日：2010年3月16日

氏名：戸村 京子

所属団体：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部

受入先機関名(所在国)：慈善団体「チェルノブイリ被災者ゼムリャキ Zemlyaki」(ウクライナ)

研修期間(全体)：2009年9月9日 ~ 2010年3月10日

研修テーマ：チェルノブイリ被災者団体活動への会員の参加意識と果たす役割、独自の組織活動の手法を学ぶ。

全体研修目標：

1. 「ゼムリャキ」の目的など、団体組織の設立と経緯を把握する。
2. 実施プログラムの独自の活動手法を学ぶ。
3. 放射能被災者固有の問題について、会員の健康問題、経済的問題等を調査し考察する。
4. 組織運営について、財政面などの問題点と、支援団体との関係性、会員の参加意識や課題を考える。

これらの研修から、所属団体の支援する被災者団体の活動と対照させ、研修の成果を今後の支援に役立てる。また、現在実施している放射能汚染地域におけるプロジェクトの今後の実用化段階での住民参加・市民組織の可能性の参考とする。

具体的な研修内容：

1. 「ゼムリャキ」の団体設立の経緯・目的、これまでの活動実績について、文献資料・聞き取り、フィールド調査により研修する。
2. 医療支援、教育・文化プログラム、貧困家庭「SOS プログラム」、「地球を救おう・国際キャンペーン」等のプログラムを、日常の実務を通して研修する。
3. 健康問題(身体的・心理的)、経済問題(年金・被災者補償)について、聞き取り・アンケート調査、フィールドワークにより研修する。
4. ゼムリャキの組織運営について、財政的問題と団体の自立性、支援団体との関係性や問題点の有無、会員・スタッフがどのような意識で活動に係わっているのかなどを、日常の実務、聞き取り・アンケート調査、フィールドワークにより研修する。

研修の成果：

- 1) 「ゼムリャキ」の団体設立の経緯・目的、これまでの活動実績について

研修受入先「ゼムリャキ」にて研修開始時に、オリエンテーションを受け、現在実施中のプログラムや過去の資料の一部から活動の概要を知ることができた。またその後の実務研修の中で、活動資料・記録写真等の整理作業を通して、これまでの活動実績を見ることができた。

それらから「ゼムリヤキ」という被災者の市民団体がどのような目的で設立されたか、その後の活動経緯について改めて知ることが出来た。1986年4月26日のチェルノブイリ原発事故により、主に原発で働く人々の町・プリピャチ市から、事故後3日目に強制疎開させられた事故被災者が最も多く住むキエフ市の現デスニャンスキー地区にて設立され、団体名は元プリピャチ市民同士である「ゼムリヤキ(同郷人たち)」と名付けられた。元プリピャチ市文化会館の活動が再開されることになり、その中心メンバーが活動を始めた。集会に集まってくる人々は疎開直後、家族・親戚・友人の移住先が分からなくなったため消息を問い合わせる仕事や、強制疎開という未曾有の体験による被災者の精神的サポートが重要な活動となった。その他放射能被災者の健康増進や、社会的・経済的な支援活動を行なっている。その後幾度か拠点が変わり、現在の市立幼稚園の一角に事務所を置き活動を続けている。

このように、ゼムリヤキは団体を設立した代表者をはじめスタッフ全員が同じ被災者という立場にあり、未曾有の体験やその後の苦難の人生を会員と共有している。それゆえ、被災者の精神的サポートを重視し、互いに助け合いながら生きているという互助組織としての団体の存在意義を持って活動してきている。

資料の整理作業では、事故直後の写真や避難時の数少ない持ち出し品である身分証明証などを実際に手にした。それらはチェルノブイリ事故関連資料として出版されている書籍等の生データであり、事故被害の実態の一端に触れる貴重なもので、当事者の運命に思いを馳せると心が重くなった。ゼムリヤキではこのような資料を、国立チェルノブイリ博物館と協力しながら折に触れ展示公開している。

2) 医療支援、健康教室、貧困家庭への「SOS プログラム」、教育・文化プログラム、「地球を救おう・国際キャンペーン」等主なプログラムについて

医療支援

ゼムリヤキはその設立経緯から見ても、独自の多彩な活動を行なっている。まず医療支援は、支援団体からの支援金が入ると、会員に必要な医薬品・医療品を購入し、登録されている会員に配分する。「チェルノブイリの犠牲者の子どもたち」というプログラムには、被災児童(被災者の親から生まれた)で障害児のリストに現在37人が登録されており、白血病や先天異常などのいずれも深刻な病状で、その必要な医薬品の一部が提供されている。その他、18人の孤児の登録リストもある。

また地区の赤十字から、時折風邪薬やビタミン剤などの医薬品が配分され、会員は一単位に5フリブニ(約55円)づつのスタンプを購入し、引き換えに医薬品を受取るようになっている。

被災者は本来、「チェルノブイリ惨事の被災者に関する法律」では無料で治療や医薬品が受けられるとされているが、実際には法律は年々実質的には機能しておらず、被災者は治療を受ける場合は自分で医薬品や点滴キットなどを購入し、持参しなければならない。入院・手術・治療で多額の医療費が掛かり、経済的に余裕がなく民間薬を使う人や、自分で薬草を作って自宅で静養している人が多いと聞いた。被災者が高齢化し、発病率も高くなり、毎年多くの人々が支援を求めてきて、全体の会員リストは3000人以上に上る。

事務所にはしばしば、医療費が支払えないので助けてほしいという相談の電話や家族の訪問が多くあり、その都度スタッフ一同は重い表情で、国の補償すべきところであるものの少しでも治療費の支援をと、膨大な数の支援の必要な被災者リストを前に苦悩していた。また会員の高齢化と共にガンなど重篤な病気も増え、亡くなる人が相次ぎ、重病で入院中の家庭的な問題のある会員には、スタッフが定期的に食品や料理を持って見舞いに行くなど、会員への細やかなケアをしている。

これまで数年に亘って行なわれている、日本の広島県の NGO の原爆病院の医師らによる被災者のコンサルテーションは、NGO の事情により今年度は休止となっていて、再開を希望する声が聞かれた。

健康教室

05年に日本・外務省「草の根無償プログラム」に申請して提供された、健康トレーニング器具による健康増進教室やマッサージ治療を事務所内スペースで行なっている。スタッフが立会い、器具の使い方を指導し、マッサージ治療を受ける人の連絡調整を行なっている。また、VDV映像を使ったヨガ教室も、自主グループが集まって実施している。このような場と機会があることは、会員にとっても大いに心強く、直接的な医療支援のみならず予防医学的な活動として、会員も互いに民間療法や薬草など健康に関する情報交換の場となっている。

「SOSプログラム」

貧困家庭や子どもの多い家庭を登録したリストに対し支援するプログラムで、ドイツ人の支援者たち(複数)が10年以上支援を続けている。その他、ウクライナ正教会を通じての人道支援物資(中古衣料・教育・日用品など)を配分する。主にドイツから人道支援物資が来ているという。

教育・文化プログラム

ゼムリヤキのスペースで、多彩な教育・文化的活動が行なわれている。生徒を対象にした「ドイツ語教室」や会員の画家による指導で「絵画教室」、年に数回ヴォランティア講師による「英語教室」、「日本語教室」も開催されている。また、会員による絵画展示、手芸・民芸品の展示(販売を仲介し、収益の一部が寄付される)なども、常時行なわれている。

毎年4月26日の「チェルノブイリの記念集会」では、児童画コンクールや大規模な集会などを主催している。その他恒例の文化行事として「新年・クリスマスを祝う会」、「秋の祝日」、「国際婦人デーの祝日」、「日本の夕べ」等、詩の朗読や寸劇、歌やダンスなど、担当者による多彩な企画内容で催されている。

「地球を救おう・国際キャンペーン」について

98年より、毎年4月26日にチェルノブイリに思いを寄せる「地球を救おう・国際キャンペーン」が呼びかけられ、この活動は国内に止まらず各国のNGOが賛同し、ネットでも世界へ向けて発信されている。このプログラムは、研修期間終了後に実施されるため、直接研修できないのが残念なところだ。

被災者のインタビュー記録撮影

疎開経験を語る被災者の記録作業を行っており、すでに100人以上のインタビュー記録が蓄積されている。これは広島・長崎の被爆者の証言記録を知り、会員の協力を得ながらスタッフが継続的に撮影している。撮影現場を見学していると、それぞれの被災者が人生の大きな衝撃としてチェルノブイリ事故とその後の人生を語り、スタッフともども涙ながらにビデオ・フィルムに記録している。貴重な生の証言資料として今後の編集整理が待たれるものであり、大変興味深いのだが、しかし多くがロシア語でのインタビューであり、研修員の現在の語学力では細部にわたっての理解は難しいと思われる。

これらの活動プログラムは、ウクライナの新年度開始の1月に新年度の活動計画として提案され、運営委員スタッフたちの会議で協議される。組織全体的活動、文化・教育活動、健康・リハビリセンター活動、行政への活動など、4分野37項目が予定されている。これらの役割分担が決められ、担当スタッフが日常的に登録リストを管理、会員への連絡・調整を行い、皆で協力し合いながら日常活動を行なっている。

スタッフは会計・運転手以外はほとんどヴォランティアで、それぞれ自分の家庭の事情に応じてローテーションを組んで事務所に詰め、対応している。皆被災者であり、自分自身の体調が悪く通院や自宅休養をしながら、また痴呆症の老親や病後の家族の介護など、それぞれが問題を抱える現状の中で、被災者の支援活動を行なっていることが、身近での毎日の実務研修でわかった。

3) 会員の健康問題(身体的・心理的)、経済問題(年金・被災者補償)について

会員の健康問題や経済問題については、きわめて個人的な事柄なので、信頼関係の十分築けていない研修初期には聞き取りできなかった。そこで終盤にアンケート調査を行なった。

その他にもたまたま日本の広島大学の研究者が被災者の調査にゼムリヤキに来られ、それに立ち合い、二人の被災者の聞き取りを記録した。これは原爆被爆者と原発事故被災者という「放射能ヒバクシャ」の共通点・差異について、被災者の支援で参考になる点があるかもしれないので、今後考察していきたい。また研修のフィールドワークとして、所属団体の支援する被災者団体の聞き取り・アンケート調査をまとめた。しかしこれらは時間的にまだ十分な比較考察に至っておらず、引き続き今後の課題として取り組んでいきたい。

研修の最終段階で、スタッフの協力を得てアンケートを実施することができた。年金額等家庭の事情に踏み込んだプライベートな内容を含むものであるが、快く協力が得られたことは、これまでのスタッフとの信頼関係の構築がうまくいったことによると思われる。スタッフ等7名の回答を得た。

それらによると、自分の年金額と家族の収入を合わせて平均2,000フリブニ(およそ22,000円弱)で、何とか日々の糧を得ている経済状況といえる。先にも述べた「チェルノブイリ惨事の被災者に関する法律」は国家補償でありながら、国家財政の困難から、医療費の無償は実行されておらず、公共交通が無料、公共料金が半額程度しか提供されていない。そのため生活は凌いでも、病気で入院・治療となった場合に、医薬品費に事欠く状況にある。それゆえ、被災者はゼムリヤキでの医療支援を拠り所としているといえる。

被災者の健康問題は年々深刻になり、ゼムリヤキのスタッフや会員でも亡くなる人が増えている。研修員の良く知る女性も、研修期間中にガンで治療の甲斐なく亡くなった。アンケートでも腫瘍や心臓病、脳梗塞などの病名が挙げられている。心理面で常に健康状態に不安を感じていたり、事故後26年目を迎える今も避難時や直後の困難な生活をしばしば夢に見たり思い出す人がほとんどである。このように被災者は現在も、身体的な病気のみならず心理的にも事故の影響を長く抱えていることがわかった。

4) ゼムリヤキの組織運営、団体の自立性、支援団体との関係性、会員・スタッフの参加意識について

日常の実務の中で、支援金で購入された医薬品の受け取りに被災者が事務所を訪れ、支援者・団体宛にお礼の手紙を書いていく様子をしばしば見た。またゼムリヤキの団体としても支援者・団体への丁寧な報告書類が作成され、支援者・団体とのきめ細かな関係性がわかった。またドイツの支援者の訪問で、日本の支援団体とは違う活動に触れ、興味深かった。同時に、自分自身がこれまでの支援活動で支援先を訪問する立場だったが、迎える側の立場や準備の様子がわかり、今後の活動において反省する点があった。

ゼムリヤキの慈善基金団体という立場から、財政的に支援者・団体に大きく依るものであることがわかる。現在も事務所の賃貸に関して、市から多額の支払が請求され、スタッフたちは頭を抱えている。しかし常にスポンサー探しを行ったり、行政関係との話し合いの場を持ったりして努力している。他のチェルノブイリ関係団体と集会や会議を行い、連携する機会も見学した。キエフ市に登録されている地区別のチェルノブイリ被災者団体のリストを入手し、それによると56団体が登録され、ゼムリヤキと同じデスニャンスキー地区では9団体が活動している。この中の一つの「チェルノブイリの障害者基金」には、聞き取り調査に協力してもらった。

ゼムリヤキでは活動の上では多彩な独自プログラムを行っており、団体の自立性、独自性を保っている。これは、支援者・団体との関係性であり、双方の意思や独立心によるもので、良い相互関係が作られている結果と考えられる。代表者と4人の運営委員のほか2)の実施プログラムや年間イベント等の活動を担当するスタッフ7人が活動している。スタッフ・会員は、ゼムリヤキの団体組織や活動に対し「大きな家族のようなもの・同じ惨事を経験した同郷人たち・交流の場・大変重要な意味を持つところ・援助を受ける可能性の場・相互親交や思いやりの場・第二の家・援助と出会いの場・道徳的な人々・精神的な支え・団結した人々・自分の人生で重要な意味を持つ活動」などと、アンケートの回答にその存在意義や参加意識を表している。亡くな

った知り合いの女性も「自分の思いを語れる場所であり、自分の不幸を身近に感じ、理解してくれる人たちと交わる可能性を与えてくれる場所」という言葉を残している。ゼムリヤキは、単に医薬品の配分などの支援活動を行なうだけでなく、被災者が人生を共に生き、精神的に励ましあう団体組織としてあることがよくわかった。活動を通して協力し合い、互いの信頼関係を密にしていた。

またこれは番外であるが、当地での6ヶ月間の生活によって物価や実際の暮らしから、市民特にチェルノブイリ被災者の生活実感がよくわかった。他にも、幾人ものスタッフの家に週末毎に招かれ、日常生活を見せてもらい、被災者の生活実態を窺うことができたと同時に、互いに信頼関係を築くことができた。

本研修成果の自団体の組織強化や活動の発展への活用方針、方法：

まず、ゼムリヤキという団体と6ヶ月間の実務研修として付き合い、その活動実態を知ると共に、スタッフ・会員たちの団体活動に対する参加意識が、単に支援金や物資の配分に止まらず、深く精神的な交流でもあることを知った。所属団体の支援する3つの被災者団体の活動を、1枚の報告書のみで理解するのではなく、直接相対し、その問題点や苦労や喜びなどをよく理解しあう必要を痛感した。その基本の上に立って、活動計画を聞き、意見交換し、団体の自立性を尊重する。それぞれ会員の具体的な声を聞きながら、支援活動を行なう。これらの団体への支援は長く続いているが、それだからこそ、基本的な直接の対話が欠けてしまうということを避けていかねばならない。それは支援団体の自立性だけではなく、支援する側の成長となると考える。

さらに今後、実施中の放射能汚染地でのプロジェクトの実用化の段階で、現地の住民参加を呼びかける場合の重要なポイントとなると思われる、主体的な参加意識をどのように持ってもらえるのかを考えていきたい。

NGO 長期スタディ 最終報告写真 09.09.08 ~ 10.03.10

チェルノブイリ救援・中部 戸村 京子

慈善基金「チェルノブイリ被災者・ゼムリヤキ」(ウクライナ・キエフ市) 研修



ゼムリヤキ事務所でそれぞれ担当の活動



支援金で購入された医薬品の仕分け作業



チェルノブイリ障害者基金の会議



クリスマスプレゼントを受取る子ども



会員へ電話連絡



被災者団体が合同で集会



広島大学の被災者聞き取り調査



3/8「国際婦人デー」の祝日イベント